



『平家物語』における文覚説話について : 延慶本を中心に (二〇二三年度修士論文要旨)

楊, 夢桐

(Citation)

國文論叢別冊, 2:17-18

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491573>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491573>



『平家物語』における文覚説話について

――延慶本を中心に――

楊 夢桐

本論文は、延慶本『平家物語』において源頼朝の挙兵に深く関わった高雄の僧文覚について考察を行った。文覚が物語に登場する場面が多くあり、彼に関連する説話は大きく分けると、巻五の頼朝挙兵にまつわる記事と巻十二の六代助命に関連する記事の二つの説話群から構成されている。巻五の文覚説話によると、伊豆に配流された文覚が流人頼朝を「日本国ノ大將軍」と相して、さらに義朝の髑髏と称する骨を頼朝に見せて平家討伐の謀叛を勧めた。その後、彼は頼朝に挙兵を決意させるため、密かに福原に行って院近臣の光能を通じて後白河法皇から平家追討の院宣を受け取った。物語の前半で文覚が頼朝の挙兵に大きく貢献した重要な人物として描かれている。ところが、巻十二になると、壇ノ浦合戦を経て平家が敗滅した後、かつて頼朝の挙兵に尽力していた文覚が頼朝の意思に背き、平孫狩りの嵐から敵側の嫡流・六代御前の命を助けた。このように、文覚は専ら源平両氏の運命を決める決定的な瞬間に登場し、物語を展開させる重要な役割を果たしている。それに、もう一つ注目されることは、作中で「叛逆者」の性格が強かった文覚は死後怨霊となって後鳥羽院政にも祟りを起こした。延慶本が文覚の最期を承久の乱と関連づけるような形で物語っている点からも窺えるように、作中の文覚がある意味で超人化され、歴史を動かしているように造型されている。

ところで、なぜ『平家物語』が文覚を特別扱いして、歴史を変える重要な場面に彼を登場させるのか。また、『平家物語』では「謀叛の仕掛人」文覚に関連する説話の分量が不自然に多い理由は何だろうか。その疑問を解明するために、筆者が延慶本における文覚説話を研究対象にして、作中の文覚像を把握した上で文覚説話の創作背景を検討した。

本論文の序章はまず覚一本と延慶本を比較対象にして分析し、記述の差や説話配置の相違があるものの、文覚説話が『平家物語』の構想に関わっていることを確認した。特に延慶本で見ると、巻五の一連の文覚説話が頼朝挙兵話群の直前に記し置かれ、両説話群は物語の構想上で有機的に結びついていることが明白である。次に、文覚に関する先行研究を整理してみると、従来の研究は主に「叛逆者」としての文覚像に焦点を絞っているらしい。ところが、虚実綯い交ぜの『平家物語』において、文覚の文学的人間像が如何に形成されたかについての論証はまだ十分ではない。したがって、本研究の課題の一つは、文覚という歴史上実在した人物を平家作者がどのように捉えて作中の文覚像を作り出したのかを判明することである。

第一章の第一節は、巻五に登場する文覚の役割を考え、頼朝挙兵における文覚の存在の大きさを詳細に分析した。また、史実として頼朝挙兵の直接のきっかけは以仁王の令旨であったことを明確にした上で、『平家物語』が令旨に代わって、文覚がもたらした院宣を重視する理由について考察を行った。筆者は福原院宣説話の形成を論ずる際に、山田昭全氏の論を参考にしつつ、光能を介して文覚が後白河院と連携したことを再考した。そして、院宣の

話が、文覚の弟子によって、文覚を中心とする神護寺の周辺で形成された可能性を示した。続けて、第二節は文覚の伊豆配流をめぐる考察である。この部分で筆者はまず『愚管抄』と『吾妻鏡』の記録に拠って歴史上での文覚と頼朝との連携を探り、伊豆配流をきっかけに二人が親密な関係を結んだことに着目して、拳兵の教唆は事実であることを論証した。次に、伊豆配流の直接の契機となる勧進帳事件を取り上げ、そこから見いだされた「愚口」の文覚像は現実の文覚の延長上にあったことを論じた。文覚伊豆配流の理由をさらに深掘りすると、源頼政父子と文覚との関係が浮かび上がってきた。それこそ文覚が伊豆国に流された一番大きな理由と考えられる。第三節は、拳兵教唆の内容に焦点を当て、物語が「相人」の役目を文覚に担わせる理由について考察を行った。結論としては、文覚が頼朝を「日本国ノ大將軍」と相して拳兵を勧めた話は文覚の弟子・神護寺千覚のもとで形成されたものである。平家作者がそれを物語に導入する際に、八幡大菩薩、文覚、頼朝三者の内的連関を捉えて、「相人」の上にさらに「八幡大菩薩のメッセンジャー」としての側面を文覚像に付加した。

頼朝を拳兵に導き、謀叛の仕掛人としての役割をまっとうした後、文覚は一旦物語から退場した。そして、彼が再登場した場面は主に物語の結末部、いわば巻十二で平家の子孫六代に関連するところに集中している。そこで、慈悲深い救済の聖と恐ろしい呪詛の怨霊の二面性を持つ文覚像が描かれている。本論文の第二章は巻十二の文覚説話を中心に考察を行った。まず人物像から見ると、巻五に見られた荒々しい文覚像と異なり、巻十二で六代を助けた文覚はあたかも「慈悲深い聖」のように造型されている。前

後の人物像の不統一は文覚説話の素材源の違いによると推測される。小林美和氏によれば、巻十二の六代助命説話の素材源は斎藤兄弟の周辺にあったと思われる。そして、史料より確認すると、歴史上の文覚は確かに六代とその家族や家人たちを庇護したようである。こうした文覚は物語でも現実でも一つの「アジール」として機能していたのである。また、三十六年後の承久の乱で文覚のように挺身して戦敗側の武士とその遺族を匿ったのは高山寺の明恵である。続けて第二節で、筆者は『平家物語』の成立時点に近い『承久記』に目を向け、明恵の高山寺が勢多迦丸と京軍武士の最期譚を育成した場であることを考証した。加えて、高山寺は『平家物語』文覚説話の素材源と思われる神護寺とはもとと不可分の関係であるため、両作品の説話が共通した成立基盤や歴史認識を持つことが容易に想定される。それを念頭に置きながら、筆者は第三節で承久の乱と関わる文覚の最期譚の成立について検討した。話の形成圏としては、神護寺・高山寺文化圏が想定される。さらに言うと、上覚と明恵二人の下で、神護寺興隆の第一人であった師の文覚に対する追憶や回想を基に、承久の乱と関連する文覚の最期譚が作られたと考えられる。

以上の検討を通して、本論文は文覚説話の創作背景を明らかにした。上覚・千覚・明恵を始めとして、文覚の弟子たちが文覚の伝説を世間に広く伝え、文覚説話の物語化の土台を築いた。その土台の上に平家作者が歴史上の文覚の活躍ぶりに焦点を当て、文覚と頼朝、文覚と頼政、六代らとの結びつきを捉えて、文覚の活動が中核に据えられている『平家物語』を構築したと考えられる。

(よう) もうとう)